

# ヘーゲルの思弁的命題

山 根 共 行

## 一 はじめに

ヘーゲルの哲学は周知のように、すべてが動くという考えの上に成りたっているが、命題のもっとも基本的な形式である  $S \text{ ist } P$  もまたヘーゲルによれば、ある動きの表現として理解されなければならない。すなわち、主語  $S$  で表現されるものが述語  $P$  で表現されるものに変化してゆくという動きである。この限りでは、 $S \text{ ist } P$  ( $S$  は  $P$  である) という命題は、 $S \text{ wird } P$  ( $S$  は  $P$  となる) と読み換えてもさしつかえないだろう。——ヘーゲルは、 $S \text{ ist } P$  という基本的な命題の読み方、理解の仕方に関して、思弁的命題 *spekulativer Satz* という呼び名をもちいて、その命題の表現するところのものをよく読み取るように、読者に注意を促している。我々はまず、ヘーゲルが『精神の現象学 *Phänomenologie des Geistes*』の序論の中で思弁的命題について述べた箇所を取り上げその理解に努めよう。そしてその後いくつかの例を検討しながら、思弁的命題の分類の特徴づけを試み、最後にこれらをもとに『論理学 *Wissenschaft der Logik*』の始まりの部分を解釈してみよう。

## 二 思弁的命題 *spekulativer Satz*——

### 『精神の現象学』序論における規定

『精神の現象学』<sup>フオアレーデ</sup>序論の「Das Wahre ist das Ganze. 真なるものは全体である。」で始まる第20段落の中で、おおよそ次のことがらが述べられている。

ひとつの言葉 *Wort* 以上のもの、すなわち二つの単語を主語と述語としてもつ命題 *Satz* は、ひとつの言葉とは異なり、すでに他のものになるこ

と Anderswerden、および、この他のものが元に引き戻されること zurückgenommen werden、換言すると、ある種の媒介 Vermittlung を含んでいる。

ひとつの言葉 Wort としてこの第20段落では、神性なもの das Göttliche、絶対的なもの das Absolute、永遠なるもの das Ewige などが考えられているが、これらの言葉は、自らを規定する sich bestimmen 以前はただ抽象的・無内容な表現であり、通常の対象 Vorstellung にとっては何らかの意味をもちうるが、哲学 Philosophie あるいは概念的把握 Begreifen にとっては不十分・不適當な表現方法である。なぜなら、これらの言葉のもとに、通常、何らかの動かぬものが真なるものとして表象されているのであるが、哲学的な意味で真なるものは全体であり、つまり、動くものの過程全体、あるいは過程の結果であって、けっして不動の単なるひとつの言葉でもって表現されるようなものではない、というのがこの段落の主旨である。

さて、我々のテーマ「思弁的命題」との関連でまず重要なのは、主語と述語を備えたひとつの命題は、他のものになること Anderswerden、媒介 Vermittlung を含むというヘーゲルの基本的な指摘である。これは一体どういう意味であろうか。我々の考えを述べてみよう。——主語 S が述語 P になる (S wird P)。P は S とは異なる (P ist anders als S)。この P はどこからくるのか。他ならぬ S から。主語 S であったものが、今、運動の過程をへて P となっている。運動の過程の始めには S があり、P はなく、運動の終わりには S はなく、P がある。あるいは P となった S がある、とも言えるだろう。図に表すと次のようになる。

思弁的命題の構造

- |   |   |     |   |
|---|---|-----|---|
| 1 | S |     |   |
| 2 | S | ist | P |
| 3 |   |     | P |

注) S 主語 P 述語

## ヘーゲルの思弁的命題（山根）

- 1 運動の始め
- 2 運動の過程
- 3 運動の結果

次に、他のものになること Anderswerden が元に戻される zurückgenommen werden ことでもある、とはどういうことだろうか。それは、P はSとは異なるという相違の側面に対し、運動は同時にもうひとつの側面、S はSとしては減じるが、PとしてSがなお生きているという保存の側面、さらにこの保存を根拠としたSとPの一体性・同一性の側面を見落としてはならないことを意味している。この限りでは、図の運動の結果として単にPを記するだけでなく、PとしてのS (S als P) を用いた方がより運動の性格を明確にすることができるだろう。

### 三 思弁的でない命題

ヘーゲルは、これまで我々が検討してきた序言の第20段落以外の箇所でも、「思弁的命題」に関してはほぼ同様のことがらをより詳しく述べているが、しかしすべての命題が思弁的な命題として読まれるべきだとは言っていない。ヘーゲルの主意は序言全体を通じて、哲学的・思弁的な真理は単なる言葉 Wort でもって表象されうるものではなく、命題 Satz でもって始めて表現されうること、そして、この命題は、通常の命題と文法上は同じ S ist P (主語——コプラ——述語) の構造もっているが、その読み取り方に注意せよ、そこに表現されている思弁的運動を十分に読み取るようにせよというものであった。それゆえ我々は次に、命題のうち、まず思弁的なものと思弁的でないものとを区別する必要がある。

(a) PがSの属性のひとつを示す命題をまず検討してみよう。このバラは赤い。このバラはいい匂いがする。このバラはこれから咲くところだ。この子供の服は赤い。これらの命題は、主語「このバラ」「この子供の服」の種々の属性のうちのあるひとつをそれぞれ言い表している。このバラの赤い色ははず

れ赤くない色へ、あるいは鮮やかな赤から衰えた赤へ、また、いい匂いのする状態から何の匂いもしない状態へ変化するだろう。しかし、「この赤いバラ」自身が「赤い色」そのものに変化することはない。通常、主語の「このバラ」が基体 Substrat あるいは実体 Substanz であり、述語の「赤い色」が偶有性 Akzidenz とみなされる。主語 S は変化せずに根底に横たわるもの、変化は述語 P の偶有性に現れると考えられる。さらに、主語「このバラ」の後に「赤い」という述語がくるのか、または「いい匂いがする」という述語がくるのかは、主語「このバラ」にとっては外的な要因、すなわち観察者の関心・判断に依存する。この主語と述語の関係は同様に述語の方からみても必然性をもたず、「赤い」のは何も「このバラ」に限らず、「この子供の服」でもありうるのだ。

(b) S と P が種と類の関係にある命題、たとえば「バラは植物だ。キクも植物だ。」においては、述語は主語の属性ではなく本質的なものを表現するため、主語自身のうちに特定の述語との結びつきの根拠が認められるが、しかし、外延は述語「植物」の方が主語「バラ」「キク」よりも常に大きく、同一ではない。

(c) P が種と類をもちいて S を定義する命題、たとえば「人間は理性を備えた動物である」においては、述語 P は主語 S の本質を表すだけでなく、さらに S と P の外延は同一となる。

以上の(a)(b)(c)の命題には、いずれも不動の実体が主語の位置を占めているのが特徴であり、主語 S から述語 P への動きは、まだ問題となりえない。

#### 四 思弁的命題の三類型

次に、ヘーゲル自身によってはすべて思弁的命題とみなされているが、我々の捉え方からすると、それぞれ多少とも命題のもつ意味が異なるので少し立ち入って詳しく検討してみる余地のある三つの型について述べてみよう。

(a) Gott ist das Sein. 神は有である。

この命題はヘーゲル自身が序論の第62段落の中で思弁的命題の例として挙げているものであるが、我々の捉え方からすると、Gott から Sein への運動が成り立たないゆえ、この命題は本来の狭義の思弁的命題には該当しない。この命題は、表象には適当であるが概念的把握にはふさわしくない表現、すなわち、神 Gott、神性なもの das Göttliche、絶対的なもの das Absoluteなどを、哲学の表現である思弁的命題の主語にふさわしい言葉に置き換えることを要求しているのである。つまり、神は有として把握されねばならない、Gott ist als Sein aufzufassen という要求である。神は有である、という命題の主語としての神は、不動のもの、ある実体 Substanz として表象されているのであり、まさにそれゆえ、そのままでは思弁的命題の主語、思弁的運動の主体としてはふさわしくなく、別の言葉、別の概念をもちいる必要が出てくるのである。有としての神 Gott als Sein、これが運動の始まりなのであって——『論理学』の始まりはこの有 Sein である——神は有であるという命題には、まだ、このような思弁的運動は含まれてはいない。我々は、SからPへの運動の表現としての  $S \text{ ist } P$  を本来の狭義の思弁的命題と理解したい。

(b) 理性的なものは現実的であり、そして現実的なものは理性的である。  
Was vernünftig ist, das ist wirklich; und was wirklich ist, das ist vernünftig. (『法の哲学』序言)

このタイプの命題において主語Sと述語Pは同義語である。主語Sから述語Pへの狭義の思弁的運動はこの場合も考えられてはいない。まず、現実的なものとは何を意味するのか。『精神の現象学』の序論第21段落の中で人間の形成を例にとってヘーゲルはだいたい次のようなことを言っている。

胎児そのものは理性を備えた人間となる可能性をもち、即自的 an sich には人間であると、あるいは理性的なものといえるが、自覚した対自的 für sich な存在としては、成長した段階、自らを形成した段階ではじめて理性的なものとなる。この形成の結果が、理性の、あるいは人間の現実的な姿である。

つまり、形成過程の最初ではなく最後の段階が現実的であり、これに対し最初の段階は即自的あるいはただ可能性を有するだけのものと理解されている。これが現実性あるいは現実的なものの第一の狭い意味である。しかし他方では、死んだもの、動かないものに対し、生き生きとしているもの *das Lebendige* を意味し、現実的なものとは、まさに運動しつつあるものを、その運動の段階いかなを問わず意味する。次に、真なるもの *das Wahre* という表現も、同様に二通りの意味に使われている。たとえば、前にみた序論第20段落の中で、真なるものは全体である、と述べた後すぐに、「全体はしかし、自らの発展を通して自らを完成に導く實在に他ならない」と続けている。これは広義の「真なるもの」が使われている場合だが、第18段落の中では、同じ「真なるもの」が狭い意味で使われている。すなわち、「この自らを回復する相等性、あるいは他者における自己自身への反省——根源的な統一そのもの、あるいは直接的な統一そのものではなく——これのみが真なるもの *das Wahre* である。」さて、理性的なもの *das Vernünftige* についてはどうであろうか。まず、同一性を基盤に固定した思考を貫く悟性 *Verstand* に対し、理性 *Vernunft* は運動の源泉たる否定性に近づけられて理解され、生き生きとしたものの力そのものと考えられる。しかし一方では、『論理学』の第三部で概念・判断・推論が問題となっているところでは、すべて理性的なものは推論である *Alles Vernünftige ist ein Schluß* とさえ言われている。つまりここでは、概念の二分割の結果としての判断、そしてこの判断の発展としての推論は、この三つのカテゴリー（概念・判断・推論）を諸段階とするひとつの運動の最後の完成された段階なのであり、「理性的なもの」もこの命題「理性的なものは推論である」においては、運動の完成の段階を示していると言えるだろう。以上のように、現実的なもの、真なるもの、および理性的なものは、それぞれが広義にも、また狭義にももちいられる場合があること、そして、どちらの場合にも、内容上、相互に同義語としての性格を持っていることがわかるであろう。

この型の命題にあっては、主語と述語はともにそれぞれが運動するものを意味するが、しかし、主語 S から述語 P への運動、本来的な思弁的運動はここにも見い出すことはできない。S と P は同義語的關係にある。

（c） 本来的な狭義の思弁的命題

この型の命題についてもう一度まとめてみると、本来的な狭義の思弁的命題においては、まず、述語Pは主語Sのもついくつかの属性のうちの一つを表すのではなく、主語Sの本質的なものを表現する。さらに、主語Sと述語Pは同一であり、かつ相互に異なる。この命題は、主語Sが述語Pとなる運動の表現である。

主語Sが述語Pとなる思弁的運動の全体を叙述したものが、ヘーゲルの『論理学』に他ならない。そして、この思弁的運動を「移行」として把える存在論、「反省」として把える本質論、「発展」として把える概念論がその三つの段階をなす。『論理学』の骨子をなす文あるいは命題は、基本的にはすべて本来的な狭義の思弁的命題である。我々は次に、これまでの理解を基礎に『論理学』の難解な始まりの部分の再構成と解釈を試みよう。

## 五 『論理学 Wissenschaft der Logik』

### の始まりの部分の再構成と解釈

『論理学』の始まりの部分は、その骨子だけを取り出すなら、次のようにまとめることができるだろう。

① Sein…… ② Sein ist ein unbestimmtes Unmittelbares. ③ Nichts…… ④ Nichts ist auch ein unbestimmtes Unmittelbares. ⑤ Sein und Nichts sind also dasselbe. ⑥ Sein ist Nichts und Nichts ist Sein. ⑦ Die Wahrheit vom Sein und Nichts ist das Werden, die Bewegung des Seins ins Nichts sowie des Nichts ins Sein.

① 有…… ② 有はある無規定・無媒介なものである。 ③ 無…… ④ 無もまたある無規定・無媒介なものである。 ⑤ それゆえ、有と無は同一である。 ⑥ 有は無であり、無は有である。 ⑦ 有と無の真理は、有の無への運動、また無の有への運動、すなわち生成である。

この始まりの部分において本来の狭義の思弁的命題とみなすことができるのは最後の⑥だけである。なぜかと言うと、②は①についての観察者の判断であり、また同様に④は③についての観察者の判断であり、両者ともにいわゆる外的反省の表現である。⑤についても②と④と同じく観察者の判断に属するとみなすことができる。⑤は、有と無が同一のもの二つの名称であることを意味している。さて、①から⑥までは、いわゆる形式論理学に従った思考で十分無理なく跡をたどることができるだろう。もっとも①と③は述語がまったく抜けているために完全な文ではないが、有と無は⑤にみられるように同義語なのである。それ以上のことがらは何ら叙述されていない。①から⑤までは、有と無がそれぞれ運動する何かであるかどうかは、まだ問題とはならない。しかし、まさにこの点が、有と無がそれぞれ運動する何かであるかどうか、⑥の理解のカギとなる。⑤と⑥の間に、形式論理学は根本的な相違をみることはない。同じことがらが、二つのただ文章論上相違した命題で表現されているに過ぎない。しかし、我々の理解では、⑥の命題では、有と無の両者ともに、自らの内に対立者を含むものと仮定されているのである。この対立者の不可分性 *Ungtrenntheit* はヘーゲルによって実は①の命題においてすでに仮定されていたものであると言わざるをえない。しかし、この最初から仮定された有と無の不可分性は⑥の命題においてはじめて表面に出てくるのだ。⑥の命題はこのような仮定に支えられてはじめて⑤とは異なった意味をもつようになる。すなわち、有は無に移行し、無は有に移行するという内容である。⑦は⑥に表現されている運動を生成 *Werden* という新しいカテゴリーで捉え直している。すなわち⑦の命題は、有は有としての自らを、また無は無としての自らを否定する運動の過程にあるものとして、有および無の真理を、運動の可能性に対する現実性という意味で表現しているのである。

ここで以上のような解釈のもつ問題点を指摘しておこう。⑥の命題を思弁的命題として読むことを可能にしている運動そのものの根拠、すなわち有はそもそも無を内に含み、無もまた同様に有を内に含むという仮定は、はたして妥当かつ正当なものであろうか、という問いが残されたままである。つまり①の有



が、すでに自らを否定するモメントを内に含むと仮定すること自体の問題が残っている。ここに示した我々の解釈は基本的には、生成 *Werden* という媒介を通して再び直接性を獲得する定在 *Dasein* が、有と無の二つのモメントの統一ではあるが、まず有のモメントにいわば重点的に規定されて現れるということ、もう一方の無のモメントはまだ即自的であるにとどまり、運動の過程の中ではじめて自らを定置させてくるのだという、有・無・生成の次の段階で出てくる定在の叙述をひとつのモデルとして、この定在を一步手前に引き戻すかたちで、始まりの有を理解しようとしたものである。すなわち、有そのものは元来否定性を内に含むが、しかし、最初は有という直接性によって一方的に、外からの観察者によってではあるが規定され、媒介を意味する否定性はようやく⑥の命題で有そのものにおいて現れ、この有のもつ否定性の動きが、有から無への運動を現実的なものとし、この運動に支えられて⑥の命題を思弁的命題として読む可能性が与えられるのである。